

星降りの地



星拾いの娘リゲルは今日も草原に落ちた星を拾っていた。

昨日の夜ははっきりと星の軌道が見えたので、よく落ちる場所の見当がつけやすかったのだった。せっせと持ってきた籠いっぱい星を集め終えると、リゲルは額に手をやって浮いた汗を拭った。

籠のなかでは色とりどりの星がきらきらと控えめに輝いていた。それを見て、リゲルの顔に満足げな微笑みが浮かんだ。

早朝から昼前まではこうして星を拾い、昼からは市場の指定場所で星を売り、夕方には家に帰って母と弟たちに夕食を作ってやり、夜には黒いビロードの布を広げたような夜空を見つめて次の日の収穫場の目星をつける。それが彼女の毎日だった。

彼女はそんな毎日を過ごせることをこの上なく神に感謝していた。

彼女は家族を愛していたし、自分の仕事に誇りを持っていた。現に、彼女の仕事は、星降りの地の住人ですら就ける者は滅多にいない、特殊で崇高で、人々の尊敬を一心に集める職種であった。

全てのエネルギー源が星であるこの世界では、星拾いはとても重要な職業であった。

しかし先ほども言ったように、星拾いは誰にでもなれるものではない。

星は落ちてから一晩たないうちに人の手によって地面から拾いあげなければそのエネルギーを光とともに失ってしまうのだが、地に落ちたばかりの星は、地上の人間に触れられることを嫌ってか、星拾い以外の者が触れた途端に消滅してしまうのだ。

一晩たてば何者が触れても消滅しなくなるが、その頃には星はエネルギー源としての価値を失ってしまっている。

だが、一部の人間だけは落ちてからまだ一晩たっていない星に触れても星を死なせないことができた。彼らは星に選ばれた星拾いとして人々から尊ばれ、大切に保護された。

星拾いはどの国にも最低一人は存在したが、滅多に生まれることはなかった。

リゲルは生まれたとき、この世界の風習に則って落ちたばかりの星に触れ、星の命をこの世に留めることのできた貴重な人間の一人であった。

この世界でもっとも星が多く落ちてくるといふこの星降りの地で、現在リゲルはたった一人の星拾いであった。数年前に、もう一人の星拾いであった人間が寿命で亡くなったのだった。星降りの地の人間たち皆に愛され大切にされ、リゲルは心の美しい娘に育った。

今日の分の星を拾い終えたりゲルは早速市場へと向かった。市場の者たちは皆リゲルを待ち構えていた。外見も中身も共に清らかで美しい星拾いの娘リゲルは、皆にとっては、さながら地上に舞い降りた天使であった。

星を拾うのも売るのも今では全て一人でこなしているリゲルは、今日も仕事を終えると、意気揚々と家に帰った。そして、いつものように家族のために夕食を作り、いつものように星を見るために外に出た。

この日も、満天の星が愛おしいリゲルを優しく見下ろしていた。リゲルはマフラーをしっかりと首に巻きなおし、手袋をはめ直して星羊の毛糸で編んだ帽子を深く被り、ところどころ雪の積もった地に踏み出した。

今日も星の軌道がちゃんと見えるかしら、と彼女は歩きながら考えた。今まで星の軌道がちゃんと見えなかったことなど一度もないのだが、住人全ての期待が自分にかかっているだけに、気を抜くことができないのだった。

家から数十メートルほど離れた所にある大きな水晶に、リゲルはよじのぼって腰掛けた。ここがリゲルのいつもの指定席で、ここから星の軌道を見届けて、より星の多く落ちた場所を推測するのが一日で一番大切な仕事であった。

三角にたてた膝の上で腕を組み、上を見上げてリゲルはその時を待った。

そろそろだわ、とりゲルが思った。その時、リゲルの勘通りに星が一筋、空を流れた。

一筋、二筋。続けて流れた。これは予兆だ。そろそろ、大群が流れるはず。

一瞬の間において、リゲルの期待通りに大群の星が空を横切った。それはそれは見事な眺めだった。毎日この光景を見ているリゲルでさえ、飽きることはない。それどころか毎回目を奪われてしまって、少しでも気を抜けばぼうっとしてしまいそうな頭をなんとかしゃきとさせて、星が降り注ぐ地を見定めるのだった。

今晚も、リゲルにはより多くの星が降り注いだ場所が推測できた。そして、そこが明日の収穫場となるのであった。

これで、今日一日の仕事は終わりだった。胸元で、星拾いの証であるペンダントを揺らしながら、リゲルは満足して家に帰っていった。

次の日、リゲルは昨夜予想した場所に颯爽と向かった。そこは町外れの森に囲まれた、小さな円形の広場のようにな

っている、リゲルのお気に入りの場所であった。中央には小さな泉があつて、それはそれは美しい場所なのだ。ここは度々星の収穫場となるのだが、星降りの地の者たちは滅多に近づこうとしないのであった。それが何故かはリゲルには分からなかったが、星拾い以外の人間が気安く近づける場所ではないのだというのが、大人たちの言い分だった。

目的の場所に着き、仕事にとりかかろうとしたその時だった。

リゲルは思わず固まった。

目の前の光景を映した自分の目を信じることができず、脳が思考を停止した。

しかし、時間が経ったところで、目の前の光景が変わることなどなかった。彼女の両の目は、忠実に見たままのものを映していた。

「どうして」とリゲルは思わず嘆いていた。あまりの驚きからか、それとも恐怖からか、声は震えていた。

「どうして、星が一つも落ちていないの……」

沢山の星が落ちたはずである彼女のお気に入りの場所には、星がひとつも煌いていなかった。

その日は何とか別の場所で少量の星を拾うことに成功したが、リゲルの胸の内から不安が消えることはなかった。市場のひとたちは、まあたまには不漁の日もあるさなどと言って慰めてくれたが、それでもリゲルは明日もこうなるのではないかという恐怖と戦っていた。

一つ一つの星は長持ちするし、住民はみな緊急事態に備えていくつも星を家に蓄えているはずだから、しばらく不漁の日が続いたとしても大丈夫だと思っているのだろう。実際、数日続いたところで日常生活を送る上では何の差支えもない。だが、それが一年、二年と続いたらどうなることだろう。そのことを考えると、リゲルの喉は不安で締め付けられるようだった。

「大丈夫よ、リゲル」と彼女は自分に言い聞かせた。

「今日はたまたまなかっただけ。明日になれば、またちゃんと沢山の星が拾えるわ」

次の日は、いつものように沢山の星を収穫することができた。リゲルはほっと安堵のため息を漏らし、ほら、やっぱりただの被害妄想だったのよ、たまたま昨日は不漁だっただけよと笑って仕事にとりかかった。

だが、その次の日はまた不漁の日だった。次の日も、そのまた次の日も、不漁が続いた。リゲルはまたもや恐怖におののいた。

「大丈夫だよ、リゲル」と馴染みの者たちは言った。

「明日になれば、また沢山収穫できるさ」

しかし、楽観的な住民の言葉通りにはならなかった。

夜には沢山の星が降るというのに、不漁の日が、六日続いた。

七日目、今日こそはという期待を込めて、リゲルは昨晚目星をつけていた土地に向かった。その日はいつもより一時間早く仕事場に向かった。

楽観的な住人たちはリゲルに全幅の信頼を置いているので、彼女は彼らの前では笑顔を振りまき元気な振りを装っていたが、内心は不安で不安で仕方なかった。家族にすら本心を見せることができず、まだ若い彼女はたった一人で、いつエネルギーが尽きるかもしれないという恐怖と戦っていた。戦いながら、足を進めた。

いつの間にか目的の地にたどり着いていた。着いた途端、リゲルは無意識のうちに傍にあった木の陰に隠れていた。実際に行動を起してから、彼女は自分が何かから身を隠したということに気がついた。

(私は、一体何に見つかることを恐れて隠れたのかしら)

訝しく思って、リゲルは木の陰からこっそり周囲を窺った。心臓が嫌に激しく鼓動を打っていた。そして、彼女は見た。

それは、一匹の黒猫だった。

ただの猫ではないことは一目で分かった。何故なら、その猫の身体はやけに大きかったのだ。立ち上がれば二階建ての家一軒分くらいの高さはありそうだった。リゲルは驚きのあまり息を呑んだ。

猫は右の耳に傷を負っていた。しかしそれはどうやら随分と昔に負った傷のようだった。

心優しいリゲルはその傷のことが気になったが、それは一瞬のことだった。すぐさま別のことに気をとられたのだ。そしてリゲルは自身のうちに恐怖に打ち勝つほどの強い怒りが湧いてくることに気がついた。

巨大な黒猫は、皆にとって大切なエネルギー源である星を、貪り食っていたのだ。

「ちょっと貴方！ 何してるのよ！」

怒りのあまりリゲルは自分が隠れていたことも忘れて前に飛び出した。

黒猫は落ちていた星を食うのをやめて、彼女の方に視線を向けた。リゲルは両手を腰にあてて黒猫のすぐ目の前に立ち、下から思い切り睨み付けるよう努めた。彼女は生まれてこの方誰かを睨みつけたことなどなかったもので、自分では上手く睨めているのかどうか不安だったが、怒りのおかげでそんなことはすぐにどうでもよくなった。

「何で星を食べているのよ！ 星は皆にとってとても大切なものなのよ！ 貴方、精霊でしょ！ 人間は昔精霊と約束したはずだわ！ 人間は星拾いしか星を拾わないようにするから、だから精霊は人間の分の星を奪わないでくれって！ なのにどうして私たちから星を奪っているのよ！」

黒猫はきよんととして彼女を見下ろしていたが、不意ににやりと笑って言った。

「おまえ、星拾いか」

黒猫の言葉にリゲルのなかで怒りが頂点に達した。

「私の質問に答えなさいよ！」

昔からリゲルをよく見知っており、彼女のことを心から尊敬している村人たちであったなら、これほどまでに怒り心頭なりゲルを見れば恐れ慄いたことであろう。

しかし相手は、リゲルに今しがた初めて会ったばかりの巨大な黒猫であった。彼にとっては小さな人間の星拾いなど恐れるに足りなかった。

「いいだろう、答えてやろう」と黒猫は笑った。

「どんな動物だって、食事をするだろう。植物などでない限り、何かを体外から摂取しなければ生きてはいけないからな。俺は星喰いだ。星を食わなければ、生きてはいけない。だから星を食う」

星喰い？ リゲルは眉をひそめた。聞いたことのない名前だった。

「俺の存在は邪魔だからといって、ある人間によって長い間封印されていたのだ。理不尽ではないか？俺自身は何もしていないというのに。ただ、俺が食えるものというのが星であったというだけで、俺は邪魔者と見なされ、封印されたのだ。人間の勝手な都合でな。その封印が、ついこの間……八日前だったか、漸く解けた。俺は晴れて自由の身となった。だから俺は今こうして、封印されている間に失ったエネルギーを取り戻すために、星を食っているのだ」

黒猫は、リゲルの顔をじっと見つめた。

「なるほど、確かに。風の精霊たちが噂していたが、今回の星拾いは確かに美人だな。儂い星の光がよく似合う」

「な、何言っているのよ。おだてたって、何もならないわよ」

「おだてているわけではない。思ったことを素直に言ったまでだ」

黒猫が笑みを深くした。リゲルは黒猫を睨みつけながらも、思わず後ずさった。

「おまえ、名は何と言う？」

リゲルは一瞬、素直に名乗るべきかどうか迷ったが、名を名乗ったからといって呪われることもなさそうだと判断したので、内心の戸惑いを無理矢理押さえこんで胸を張って堂々と言った。

「リゲルよ」

「そうか、リゲルというのか」

なるほど、と星喰いの猫は満足げに呟いた。訝しげに眉間に皺を寄せる彼女に対して、彼は笑みを浮かべていた。

「あ、貴方の名前は？」

「俺は精霊だ。名前などない。強いていうなら、星喰い、か」

緑の瞳にリゲルの姿を映して、そんなことより、と黒猫は言った。

「リゲルよ。おまえ、俺の女になれ」

この言葉にぎょっとして、リゲルは思わず後ずさった。足がよろけ、しりもちをついた。籠が地面に転がったが、それどころではなかった。

「な、な……何言って」

「冗談ではないぞ」

猫は笑みを深くした。と同時に彼の巨大な身体がふっと消えた。代わりにそこには、一人の青年がいた。黒髪の青年は、地面に座り込んでいるリゲルを、いたずらっぽい笑みを浮かべて見下ろしていた。

「あ、貴方は……星喰い？」

「そうだ」

緑の瞳をした青年はリゲルに手を差し伸べた。リゲルは躊躇ったが、結局手を借りずに自分で立ち上がった。彼はリゲルの態度を別段気にした風もなく、笑みを浮かべたままだった。

「おまえが俺の女になるなら」と星喰いは言った。

「俺はこの地で星を食うことをやめよう。ただし、おまえがならないと言うのなら、俺は変わらずエネルギーを溜め終えるまでこの地で星を食い続けるぞ。この地は俺を封印した、忌まわしい地だからな」

\*\*\*

リゲルは、あらかじめ見当をつけておいた別の場所で少しばかりの星を拾うと、いそいそと市場に向かった。そして早めに仕事を切り上げて、その日は家に帰った。

無駄だろうなと思いつつ、その日の晩も日課となっている星の観測を行った。より多くの星が降り注いだであろう場所を予測し、次に多く落ちているであろう場所の見当もつけておいて、家に帰って寝床に入った。

その日はなかなか寝付けなかった。

翌日。

リゲルはいつも通りの時間に星を拾いに収穫場に向かった。

星喰いには会いたくなかった。しかし、星喰いはいた。リゲルは彼を無視して仕事にとりかかった。

彼は別段何をするというのでもなく、ただ彼女が仕事をしている様を見ているだけであつた。

星喰いは毎朝リゲルの仕事場にやってきた。収穫場は日々異なるというのに、彼がいなかったことは一度もなかった。恐らく星喰いも、星を食うというからには夜空の星の軌道から、翌日より多くの星が落ちるところを予測できるのには違いなかったが、リゲルが敢えて星があまり落ちていないであろう場所をその日の収穫場に選んでも、彼はやっぱりその場所にいるのであつた。

この日もリゲルは二番目に星が多く落ちていそうな場所を選んでやって来たのだが、やはり先客がいた。

星喰いは、人の姿で、腕を組み、目を瞑って木に寄りかかっていた。

星はほとんど落ちていなかった。大方星喰いが食べてしまったらしい。予想していたことなのでそれ程落胆はしなかったが、今日はわざといつもより二時間も遅らせてやってきたので、星喰いがまだいたのは予想外だった。リゲルは星喰いに気づかれぬようにその場をそとと去ろうとした。

「拾わないのか？」

背中ごしに声が聞こえた。

「少しとはいえ、残っているぞ？ 大事なエネルギー源だろう？」

そのまま無視して立ち去ってもよかったのだが、星喰いの言うことはもっともだった。

できればすぐにでもその場を離れたかったのだが、星を拾うことのほうが自分のことよりもよっぽど重要だ。そう思い、リゲルは無言でぐるりと振り向いて、近くに落ちていたものから星を拾い始めた。

小さなものばかりであつたが、よく目を凝らしてみるとそれなりに数はあるようだった。

星喰いは相変わらず腕を組み、木に寄りかかっていたままだつたが、目は開いていた。緑の瞳が、じっとリゲルを見つめていた。彼女は視線をひしひしと感じていたが、できるだけ無視するように努めていた。しかしこれは結構骨の折れることであつた。

星喰いの近くにあるものはどうしようかと悩んで後回しにしていたが、リゲルは勇気を振り絞って拾うことにした。近くに寄って、星を拾おうと屈みこんだとき、星喰いの青年が動いた。リゲルは思わずびくりと身体を震わせた。

「そんなに驚くことはないじゃないか。傷つくだろう」

と星喰いは笑いながら言った。口で言っているだけのようだ。

「ただ、お前さんと話をしたかっただけなんだからよ」

リゲルは籠に入った星を庇うようにして、彼を正面から睨みつけた。しかし生来人を睨むということなどに慣れていないので、うまくいかなかった。結局ため息をついて彼女は諦めた。

「貴方と話すことなんて何も無いわ」

「つれないことを言うな」

からからと笑う。リゲルは訝しげに相手を見上げた。

「どうだ、少しは俺の女になる気になったか？」

途端、リゲルの顔がぼっと赤く染まった。何か言おうと口を開きかけたが、何も言えずに閉じてしまう。そんな彼女の様子を、黒髪の青年は面白そうに見つめていた。

「まあ、そう答えは急いでない。俺は気が長いんだ。ゆっくり、俺に惚れていくがいいさ」

「……自信たっぷりね」

顔を赤くしたまま呆れたようにリゲルが言うと、星喰いはまあなと胸を張って笑った。

「俺はお前が欲しい。お前を俺に惚れさせるには、俺自身が自信満々でないと無理だろう？ 欲しいものを手に入れるためには、常に前を向いてなきやならねえからな」

まったく、何という人、いや、何という精霊だろう。

リゲルは、気を抜けばますます赤くなる両頬を冷たい両手で包みながら思った。どうかこのまま、外気とこの両手の冷たさが、顔の熱を冷ましてくれればいい。忙しく打つ鼓動も、どうかどうか落ち着いてほしいものだ。

そんなリゲルを面白そうに眺めていた星喰い。リゲルはじっと見つめられることに耐えられなくなって、頬に手をあてがったまま慌てて彼に背を向けた。

そのまま駆け出してその場を離れるつもりであったのだが、それは叶わなかった。

優しい力が、リゲルをひきとめていた。彼女は後ろから星喰いにそっと抱きしめられていた。

「なあリゲル。俺と一緒にしよう」

星喰いはリゲルの耳元で囁いた。リゲルの身体がびくりと震える。そんな彼女を、星喰いは一層愛おしそうに抱きしめる。いまやリゲルは耳まで真っ赤になっていた。

「俺がきつとお前を幸せにしてやる。この星降りの地は確かに素晴らしい地かもしれないが、こんな小さな村で一生を過ごしていくのは勿体ないとは思わんか？ 星喰いとして生まれてしまったお前は、このままだと一生、この地に縛り付けられたままだぞ？ それじゃあ、籠のなかの鳥となんら変わらないじゃないか」

抱きしめられたままりゲルは俯いた。逃げ出そうと思えば、逃げ出せるくらいの力で抱きしめられていることに、リゲルは気づいていた。

しかし、リゲルは動けなかった。いや、動こうとは思えなかったのだ。それが何故なのかはリゲル自身にも分からなかった。彼女はただ黙って、星喰いの言葉に耳を傾けていた。心地よい低音が鼓膜を震わせていた。彼女の視線の先で、籠のなかの小さな星が切なげに瞬いていた。

「俺と一緒になれば、もっと広い世界をお前に見せてやる。世界は本当に広くて、大きくて、儂くて残酷だけれど、それだから一層美しい。お前はいい女だ。こんな狭い世界で一生を終えるより、広い世界に羽ばたいた方がずっといい。折角こんなに素晴らしい世界に生まれてきているのに、小さな世界だけで満足するつもりか？ お前はそんな小さな人間ではないだろう。俺が手伝ってやる。お前の世界を広げてやる。だから、俺と夫婦になろう」

そこまで言って、星喰いはリゲルからすっと離れた。

あまりにも突然だったので、リゲルは不思議に思って彼を振り返った。星喰いはこの上なく優しい笑みを浮かべていた。整った顔立ちが、彼女のすぐ目と鼻の先にあった。ガラスのように透き通った緑の瞳に映る自分を、リゲルはどこか温かく、くすぐったい気持ちで見つめた。

「今日はこの辺で帰るとするか。どうやらお前に客が来たようだからな」

そう言ったかと思うと、星喰いはリゲルの頬をそっと一撫でしてから、力強く地を蹴った。

起こった風が、星の甘い香りと共にリゲルを優しく包んだ。上を見上げると、彼は近くにあった木の枝に着地していた。

そのまま彼は振り向かず枝から枝へと、身軽に飛び移っていった。そんな彼の後姿を、どこか名残惜しそうな視線で見送っている自分に、彼女は気がついていなかった。

カサリと小さな音がしたので、リゲルははっと我に帰って音がした方を振り返った。

振り向いた先には、リゲルの幼馴染である青年がいた。リゲルは先程のことを頭から無理矢理振り払って、右手で頬に触れてもう自分の顔に熱が集中していないことを確かめると、彼にこぼれんばかりの笑顔に向けた。

「ベテルギウス！」

「やぁリゲル」

爽やかな笑みを浮かべて、赤みがかった茶髪をした青年は言った。

「毎日毎日朝早くから星拾いお疲れ様。いつも大変だね」

「そんなことないのよ」とリゲルは笑いながら近づいてくる青年を迎えた。「だって楽しいもの。綺麗で可愛い星たちを拾うのは。私は、自分の仕事が好きだわ」

彼女は本心からそう言った。

「ところでどうしたの？ 散歩？」

「長老様が君を呼んでいるんだよ」

ベテルギウスは真顔に戻って言った。

「今、村中の男たちが手分けして君を探していたんだ。一大事が起こったから。いち早く君に伝えなければならないと長老様は仰っていた」

彼の言葉を聞いてリゲルの胸の内で嫌な予感がざわめいた。「一大事ですって？」

「とにかく、早く長老様の元へ」ベテルギウスは彼女の手を取った。

「今日は市場で星を売らなくていいから、今すぐ行こう」

リゲルは頷いて、彼の手を握り返した。

二人は共に駆けていった。

星降りの地の長老は、村の中央にある神殿に住んでいた。

リゲルは神殿の入口でベテルギウスと別れてから、一人神殿の内部に入っていった。長老は神殿の奥にある祭壇の前に、リゲルの方に背を向けて座り、ぶつぶつと何か祈りの言葉を捧げている最中のような様子だった。

邪魔しては悪いかと一瞬リゲルは躊躇ったが、それでも緊急の用だと聞いたので、正座をして床に手を揃えて置き、深く頭を下げて控えめではあるがはっきりとした声音で言った。

「長老様。リゲルが参りました」

祈りの言葉がふつりと止んだ。

白髪の老人が、座ったままゆっくりとリゲルを振り返った。老人の両目は、灰白色に濁っていた。

リゲルは額が床につくくらい深く頭を下げたまま、長老が言葉を発するのを待った。長老は、たつぷりと蓄えた髭のなかで口をもぐもぐとさせたかと思うと、厳かな声を隠れた口から発した。

「頭をあげなさい、リゲル」

「はい」

リゲルは素直に老人の言葉に従った。正面から真っ直ぐに長老の顔を見つめる。

老人の灰白色の瞳は、目の前に座っている少女を見ているようで見ていなかった。いや、見ていないようで見ているようだった。

リゲルが頭をあげたのを確認したのか、老人は再び口をもぐもぐと動かした。

「リゲルや。ベテルギウスから何か聞いたかね？」

突然幼馴染の名前が出てきたことに多少リゲルは驚いたが、そういえば自分を呼びに来たのはベテルギウスなのだから、彼が何かを知っていたところでなんら不思議はないと思い直した。

「いえ何も。ただ、一大事が起こったとだけ」

彼女の返事に、老人はしわがれた声でそうかそうかと頷いた。

「そう、一大事なのじゃ。一大事が起こったのだよ、リゲルや」

長老は立ち上がろうとした。それに気づいたリゲルは、即座に立ち上がって老人の傍に寄り添い、彼の動作を手伝った。曲がった背中が痛むのか、立ち上がる際に長老は小さく唸った。リゲルは彼の背中に手を添えて、心配そうに老人の横顔を見つめた。

「すまん、ありがとう。もう大丈夫だ」

まだ心配ではあったが、長老自身ももう大丈夫だと言ったので、リゲルは長老からそっと手を離した。しかし依然として傍らに控えたままだった。

長老は振り返って祭壇の方を見上げるような素振りを見せた。

彼のもはや失われた視線が向いているであろう先には、星の女神の像が慈愛に満ちた微笑で両手を広げて立っていた。傍に控えるリゲルにも聞こえないような小さな声で、長老は女神に向かってなにかを呟いたかと思うと、両目を閉じてリゲルに問いかけた。

「リゲルよ。星喰いというものを知っておるか？」

問いかげられた彼女は思わずはっとして身体を強張らせたが、長老には気づかれていないようだった。長老はそのまま言葉を続けた。

「おまえが気に入っている場所が、村のはずれの森のなかにあったろう。星拾い以外の者が滅多に足を踏み入れない空間じゃ。あそこには確か、小さな泉があったろう」

「……ええ。ありました」

「あの泉にはな、ある精霊を封印していたのだ。精霊というよりももはや悪霊に近いのじゃがな。それが、星喰いじゃ」

「……」

「遠い遠い昔のこと、星喰いはこの世界のあちこちで我らの大切な星を貪り食っておった。星喰いというのは貪欲な悪霊でな、いくら食っても満腹というものを知らんのじゃ。そもそも、精霊というのは本来、ものを食わなくても生きていける存在なのだ。それなのに、星喰いはただ我ら人間を滅ぼしたいがために、星を食い続けた。精霊には空腹というものがないのだから、当然満腹感というものもない。だから食おうと思えばいくらでも食うことができる。星喰いのせいで、世界からは星が根絶やしにされようとしていた。我々人間はすっかり困窮して、神にもすがる思いじゃった。そんなとき、星降りの地のある星拾いの娘がな、村人を率いて果敢にも星喰いに戦いを挑んだのだ。そして激しい死闘の末、やつを封印した。その娘は丁度今のお前と同じくらいの年頃であったと記録には残っておる」

リゲルの胸は激しく鼓動を打っていた。あまりにもその音が大きいので、すぐ傍にいる長老にまで鼓動の速さが知られてしまうのではないかと思わず不安になる程だった。脳裏には、緑色の瞳をした黒髪の青年が浮かんでいた。

「お前は聡い娘だからな。ここまででもう、わしの言いたいことは分かっているじゃろう」

この老人の問いかけに、リゲルは、はいと言わざるを得なかった。この長老には嘘は通用しないのだ。声が僅かに震えてしまっていた。震えの原因を勘違いしたらしい長老は、どこか悲しげに頭を横に振った。

「やつの封印が解けてしまったのだよ。お前以外の誰かがあの地に足を踏み入れて泉に触れてしまったのだろうな、きっと。大方道理の分からない幼子であろう。わしの古いで不吉な印が出たので、ベテルギウスをあの地へ向かわせたら、既に封印は解けてしまった後だったのじゃ」

「まさか、長老様」

少しでも気を抜けば再び震えそうになる声を必死で押し隠し、リゲルは長老が呼吸を整える間に言葉を差し挟んだ。

「私に……再びその星喰いを封印しろと仰るのですか？」

「すまん、リゲル」

リゲルが怯えているのだと思った老人は、疲れきったしわがれ声で謝った。

「他の地から星拾いを呼べばいいのかもしれないが。あまり事を大きくはしたくないのでな。お前にしか頼めんのじゃよ」

さあ、今日のところはもう家に帰りなさい、と長老はリゲルを安心させるように優しい声音で言った。リゲルは機械的に長老に頭を下げ、何も言わずに彼に背を向けて神殿を出た。

神殿の外ではベテルギウスが彼女を待っていた。リゲルの青白い顔を見て、ベテルギウスは彼女の肩をそっと抱いたが、それでもリゲルの内に巣食った恐怖というか不安な想いが消え去ることはなかった。

彼女の頭はすっかり混乱していた。

朝ベッドのなかで目が覚めると、リゲルは自分の頬が濡れていることに気がついた。

自分が泣いていたことを疑問に思ったが、それは一瞬のことだった。次の瞬間には原因が分かっていた。

(どんな夢だったかは忘れてしまったけれど……嫌な夢だったわ)

心なしかいつもよりも重い身体を引きずって、のっそりとベッドから這い出る。ベッドから出た途端、冷気にぶるりと身体を震わせた。ベッドの温もりが恋しいが、仕事に出かけなければならないし、何よりももう一度眠りにつけば悪夢の続きを見てしまいそうで、怖かった。

嫌な気持ちが胸に燻るのを無理矢理無視して、あらかじめ用意しておいた服に着替えた。着替え終わるや否や、ふと視線を感じてリゲルははっと窓の方を見た。

カーテンの隙間がわずかに開いている。リゲルはわずかと窓の方に歩み寄って、カーテンを勢いよく開いた。

よお、と彼の口が動いた。リゲルは呆れ顔で、木の枝の上に乗っている星喰いを見やった。

何か一言言ってやろうと思って、リゲルは鍵を開けて窓を開いた。それを待っていたかのように、黒髪の青年はひよいと身軽に木の枝から窓枠に飛び移った。リゲルがはっとして窓から離れると、青年は部屋のなかに音もなく着地した。

「器用ね」呆れ顔のまま彼女が言った。

「だろう？」窓を閉めながら、彼は得意そうに言った。「外で待っているのは退屈だった」

「どうして家が分かったの？」

まだ眠りについていであろう家族を起きないように、リゲルは小さな声で星喰いの背中に問うた。星喰いは振り向くと同時に満面の笑みを浮かべた。

「好きな女の居所くらい、容易に知ることができる」

答えになっていなかったが、大方後をつけてきたのだろうと彼女は推測した。

「どうして家に来たの？」

たて続けにリゲルは彼に問う。この問いに、星喰いはきよとんとした表情をつくった。心底不思議そうな顔だった。

「どうして？ お前に会いたかったからでは理由にならんか？」

なんとも単純な理由だ。長老の話を書く前であったなら、リゲルはこの言葉に顔を赤らめていたであろう。しかし聞いてしまった今となっては、そういうわけにはいかなかった。リゲルは複雑な面持ちで相手を見つめた。

(星喰いは……悪霊……)

無意識のうちに両手が拳を作っていた。下唇をそっと噛んだ。

(人間を滅ぼすためだけに、星を食う……。私が、封印……する？)

いきなり黙りこんだリゲルに、星喰いは不思議そうな表情をつくった。

「どうした？ いきなり黙りこくって。何かあったのか？」

声にはリゲルを心から心配する響きがこもっていた。彼の優しい声を聞くと、リゲルのなかで戸惑いが大きくなった。

(本当にこのひとが、悪霊？ それとも、私を惑わそうとしているの？)

リゲルには判断できなかった。彼女のなかの戸惑いが正常な判断をできなくさせているのか、正常な判断ができないから戸惑っているのか、どちらなのかさえ彼女にはもう判別できなかった。

ただ、彼女は星喰いの端整な顔立ちを見つめていた。見つめているうちに、なぜだか目頭が熱くなってきた。下唇を噛む力を強くして、彼女は堪えた。内なる堤防が、涙の氾濫を防ごうとやっきになっていた。

星喰いは彼女が何か言葉を発するのを待っている様子だったが、彼女に何も話す気がないと分かったと、彼女に歩み寄った。

リゲルは身体を強張らせたが、その場から動かなかった。星喰いの青年は彼女のすぐ前に立ち、彼女の頬にそっと手をやった。それから、恐る恐る彼女を抱きしめた。リゲルは何も抵抗しなかった。

「悩んでいるな」星喰いは囁いた。

「きっと、俺のことだろう。昔話を誰かに聞いたのか」

リゲルの身体に僅かに震えが走った。それで、勘の鋭い星喰いは悟った。リゲルには見えなかったが、星喰いの瞳には陰りがあつた。憂いを帯びた陰りだった。

「お前が信じてくれるかどうかは分からないが」と星喰いは続けた。

「俺は、自分の身体を維持するのに必要だから、星を食うだけだ。決して人間の敵ではない。前にも言った通り、どんな動物だって、生きていくためには食事をする必要があるだろう？ だから俺は、仕方なしに星を食っているんだ。俺は、星しか食えないから」

「精霊は、何も食べなくてもいいんじゃないの？」

リゲルは顔を上げて星喰いを下から見上げた。彼女の瞳は、やけに静かだった。彼女の問いに、星喰いはどこか寂しそうに笑った。

「肉体を持たない精霊はな。食わなくても生きていける。ただ、俺はこうしてお前を抱きしめる肉体を持っているだろう。だから食事がどうしても必要になるのだ。最低限のエネルギーさえたまれば、そんなに量は必要ではなくなるのだが」

「どうして星しか食べられないの？」戸惑ったままりゲルは口を開いた。彼女のなかでは混乱が大きくなるばかりであった。

「それは、俺が星喰いだからだ」

「他のものも食べようと思えば食べられるんじゃないの？」

無理だ、と星喰いは首を横に振る。その仕草にはどこか諦めが混じっていた。

「試したことはあるが、俺の身体に異変が起こっただけだった。エネルギーの僅かな足しにもならない。それどころか、逆にエネルギーを失ってしまった。それに、星の女神からも言われていたんだ。お前は星を食ってしか生きてはいけない、と」

「そんなの、嘘よ！」

声を潜めていたことも忘れて、リゲルは叫んだ。星喰いの胸を突き飛ばした。

彼は、やけに素直に彼女から離れた。リゲルは僅かに俯いて、両の手を一層強く握り締めた。青年はそんな彼女をじっと見つめていた。

「私を騙そうとしているんでしょう！私を惑わして、自分を封印させないために！残念だけれど、そんなことしたって無駄よ！この星降りの地には確かに、星拾いは私一人しかいないけれど、世界には私以外にも沢山、星拾いがいるんだから！私一人を騙したって、私以外の星拾いがきつとやってきて、貴方を封印するわ！」

言い終えると、彼女は肩で荒く息をした。眉間に皺を寄せて身体を震わせながらも、彼女は涙を流すまいと堪えていた。それが、ひとを睨むことのできない彼女の、せめてもの抵抗だった。

星喰いは黙って彼女を見つめていたが、彼女が言い終えた途端ににやりと笑った。

「ばれちゃあしょうがねえなあ」

リゲルの身体の震えが一瞬、止まった。黒髪の精霊は嫌らしくにやにやと笑いながら面白そうに彼女を見つめた。

「ばれたからにはお前はもう用無しだ」

精霊の身体が動いた。リゲルは殺されるかと思って、硬く目を瞑って首をすくめたが、何も起こらなかつた。恐る恐る目を開くと、精霊は先程乗っていた木の枝に移っていた。

「せいぜい俺を封印する特訓でもしておくことだな」

そう言い残して、けらけらと笑いながら、精霊は巨大な黒猫の姿となってその場を去っていった。

後に残されたリゲルは、精霊が去っていった窓の方をぼんやりと力なく見やって立っていた。せきとめていたはずの涙が、とめどなく溢れていた。

「ばか……」

その一言は、精霊に向けたものなのか、又は騙された自分にむけて言ったものなのか、リゲル自身判断できなかった。

このことがあってから、リゲルは星喰いを封印するための特訓をすることにした。毎朝僅かばかりの星を拾って市場でさっさと売ってしまうと、夕方になる前には神殿に赴いて、長老の教えを請うた。

星喰いはもう、リゲルの元にやってくることはなかつた。長老はリゲルが熱心に取り組んでいるので、ひどく喜んでいるようだった。ベテルギウスも快く彼女の手助けをした。

星を拾うこと以外に特別なことなどしたことがなかつたので、最初のうちは失敗ばかりであったが、一心に特訓したためにリゲルの封印の腕はみるみるうちに上達していった。

ある日の夜、その日の仕事も特訓も終えて家へと帰る道の途中、ベテルギウスが突然、大事な話があるからと言い出したので、二人は村はずれの森に立ち寄った。森の奥までは流石に入らなかつたが、人目をさけてベテルギウスは少し森に入るようリゲルを促した。

リゲルとしてはこの森に入ることにさえもはや抵抗を覚えていたのだが、ベテルギウスがそんなことを知る由もなかった。

「話って何？ ベテルギウス」

封印するための剣を両腕に大切に抱えながら、リゲルは真剣な表情をして問うた。封印する際の戦いについての話かと思っているのだ。

ベテルギウスには、彼女がそういった話を予測していることがありありと分かったが、残念ながら彼の言う大事な話というのは、それとは全く関係のない話であった。

「僕が話したいのは……星喰いの封印とは全く関係のない話なんだよ」とベテルギウスは切り出した。

彼の言葉に、リゲルはきよとんとした表情を浮かべて、それでは何の話なのかと無言で促した。

ベテルギウスは最初言いづらそうに口ごもっていた。リゲルは彼を急かすでもなく、黙って穏やかな表情を浮かべて待っていた。そんな彼女をちらちらと見ているうちに、やがて言う決心がついたのか、彼はリゲルの青い瞳を真っ直ぐに見つめた。

「もし、無事に星喰いを封印することができたら」彼はリゲルの青い瞳のなかに自分の姿が映っているのを幸福に思いながら口を開いた。

「リゲル。どうか僕と結婚してくれないかい」

リゲルは息を呑んだ。重い剣を抱く腕に力を込めた。

そんな彼女を優しい眼差しで見つめながら、ベテルギウスは彼女の細い肩に両手をそっと乗せた。

彼女の肩がびくりと震えたが、彼女は抵抗しなかった。華奢な彼女には似つかわしくないかめしい剣が、細い腕のなかで鈍く光っていた。

「僕はずっと、君に恋焦がれてきたんだ。それこそ、物心ついたときから、ずっと。あまりこういうのには慣れていないけれど……。君は、僕が知っている女性のなかで、外見も内面ももっとも美しいひとだ。心から君を愛している。この想いは誰にも負けない。どうか、僕と結婚してくれ」

「ベテルギウス……」

リゲルは戸惑って彼から視線を逸らした。しかし、頬に伸びてきたベテルギウスの手によって、すぐに顔を引き戻された。彼女は何とか視線だけは下に落としたままにした。

「君のために、用意したんだ。どうか受け取ってほしい」

そう言って彼が荷から取り出したのは、小さな箱だった。

彼女は中身が予想されて受け取るのを躊躇ったが、ベテルギウスの手がほとんど無理矢理とっていいくらいの力をこめて彼女のちいさな両手にその白い箱を握らせた。

ベテルギウスの視線が、開けてほしいと訴えていたので、彼女はやむなくその箱を開けた。彼女の予想通り、そこには美しい光を放つ指輪がおさまっていた。それは、星の光であった。

「これ……」

光を確認すると、はっとしてリゲルはベテルギウスに視線を合わせた。そんな彼女の反応に彼はどこか満足したような微笑を浮かべていた。

「星の光の指輪……。こんな、高価なものを」

「君に受け取ってほしい」ベテルギウスは繰り返した。

「愛おしい君に」

「こんな高価なもの、受け取れないわ」

彼女は急いでふたをして、箱をつき返した。しかしベテルギウスは頑として受け取らない。しばらく押しつけあいが続いたが、結局負けたのはリゲルの方だった。リゲルはすっかり困り切ってしまった。

「じっくり考えてほしいんだ」と青年は囁いた。「きっと君を幸せにしてみせるよ」

——俺がきっとお前を幸せにしてやる——

胸の内で、この間聞いたばかりの音が蘇った。リゲルは胸がつきりと痛んだのは気のせいだと自分に言い聞かせた。

\*\*\*

青年は、森のなかの木の枝の上から、自分を長い間封印していた泉を見下ろしていた。

小さな泉の水は、この上なく澄んでいた。これが、自分を封印していた忌まわしい場所だとはとても思えない。素直に、ここは美しいと思える——そんな不思議な場所であった。

聴覚が非常に発達しているため、青年には森の周縁部に誰かが入ってきた足音が聞こえた。勿論、先程の彼らの会話も全て丸聞こえである。

彼らが森を去ってからも、青年はひとり物思いに沈んでいた。瞳は泉を映していたが、頭では別の光景が蘇っていた。一人の人間の少女が彼の脳裏で震えていた。

「星喰いや。お主が物思いとは、珍しいのう」

突然声が聞こえてきたので、星喰いは驚いて枝の上から落ちそうになった。

あわてて体勢を立て直し、声がした方に顔を向ける。そこには、一人の美しい女性がいた。

明らかに人間ではなかった。なぜなら、その女性は身体から淡いクリーム色の光を放っており、その上宙に浮かんでいたのだ。

腰まで届く長い髪が、風もないのにゆらゆらと揺れていた。彼女の姿を確認すると、星喰いは興味を失ったかのように彼女から視線を逸らした。

「何しにきた、星の女神」

ぶっきらぼうな物言いに、おやおやと星の女神は笑った。気分を害した様子はなかった。

「わらわが来てはいけないか？」

「そうは言っていない」

それきり星喰いは黙りこくってしまった。星の女神はそんな彼を面白そうに見つめていたが、不意に、そういえば、と思い出したように口を開いた。

「明日の夜、人間たちがお前を再び封印しに来るようじゃな」

星喰いは何も言わない。しかしちゃんと聞いてはいるようだった。星喰いの返事など待たずに、星の女神は美しい声で言葉を紡ぐ。

「折角自由を取り戻したというに、残念じゃのう。お主自身は何も悪いことはしていないというのに。わらわは本当に

残念じゃ。お前のようなやつが再び封印されてしまうというのはな」

「なら助けろ」

「それはできん」

ほほ、と女神は笑った。

「わらわは女神。神というのは、生きとし生ける者それぞれに乗り越えられる試練しか与えぬ。試練とは自らの力で乗り越えるべきものだ。簡単に投げ出したり、助けを求めたりしてはならぬ。自分なりにもがいた末に本当に苦境に陥ったとき、それでもまだ助けを求めるならば、少しは助力してやらんこともないがな。しかしまあ、それまではお主自身のちからで何とかせよ。いつでも見守っているからの」

「神ってのは、冷たいもんだな」

「失礼なことを言うやつじゃのう、お主は」と女神は少し呆れたような声音で言った。

「全ては、お主ら生ける者を愛しているからなのじゃ。甘やかすと愛しているのとは同じではない。甘やかすのは、愛しているからではない。単なる自己満足じゃ。我ら神というのは、自己満足などせんでな。己が子を愛しているがゆえに、敢えて辛い思いをさせる。全ては子らのためじゃ。お主らの成長のためじゃ」

泉の方に視線を戻して、星喰いは物思いを再開しようとした。しかし、それは叶わなかった。女神がまたもや、そうそう、と今まさに思い出したとでも言うかのように、話を切り出したからだ。

「明日の夜、星降りの地に、他の街から軍勢が攻めてくるらしいの」

「なに？」

星喰いは再び女神に視線をやった。星喰いの緑の瞳に移る彼女は、今度は微笑んではいなかった。代わりに、どこか憂いを帯びた表情が、その美しい顔に宿っていた。

「この地はこの世界でもっとも多く星が降る地であるからな。他の地方の人間としては、喉から手が出るくらい欲しいものなのであろう」

表情と同じくらい憂いを帯びた声が彼女の口から放たれた。

「まったく、人間というのはどうしてこうも相争うのか。わらわには理解できん」

「星拾いは」

彼女の独り言を遮って、星喰いは言った。

「星拾いの身は、安全なんだろうな」

「……お主が気にかけている、あのリゲルとかいう娘のことを考えておるのか？ お主を疑った、あの娘のことを？」

星喰いはそれには答えなかった。ただ、彼女の顔を真っ直ぐ見つめるだけであった。

女神はそんな彼をどこか面白そうな表情で見つめ返していたが、ふと視線を逸らすと、再び物憂げな声音で言った。「そうじゃな……全てはせめてくる街の領主の気分次第といったところか。殺すかもしれんし、星喰いは役にたつからといって生かしておくかもしれん。しかし、生かしておいたところで、その娘が良い扱いを受けることはないじゃろうな。娘にとっては憎い仇となるのじゃから、いつ反抗してもおかしくないじゃろう？ 捕虜としてひどい待遇を受けることは、まず間違いないであろう」

女神がそう言い終えるや否や、一陣の風が巻き起こった。

女神が一瞬目を閉じ、次に目を開けたときには、既に星喰いの姿はなかった。それを確認すると、女神は僅かに微笑んで、彼女もまたその場から姿を消した。風のない、透き通った空気があたりを漂っていた。

\*\*\*\*\*

「いよいよ、星喰いの封印に赴く時が来た」

長老は厳かな声で宣言した。長老の背後の祭壇には、星の女神が鎮座していた。

星喰いの封印のために選抜かれた若手の精鋭たちが、嚴重な装備をして、長老の前に列を作って胸を張って立っていた。

丁度真ん中の列の一番前に、リゲルはいた。彼女もまた装備をしてはいたが、他の精鋭たちとは異なり、戦いのための装備ではなかった。彼女の装備だけは、封印するための装備であった。細い腰には、重い封印の剣が控えていた。彼女のすぐ右手には、ベテルギウスが立っていた。

「皆の者、相手は手ごわい悪霊じゃ。決して油断するでないぞ」

長老の言葉に皆は大声を上げて答えた。皆、自信に満ち溢れ、これから自分たちが成し遂げるであろう偉業に思いを馳せては喜びないし誇りを感じていた。

ただ、リゲルだけは、皆と違ってひとり浮かない顔をしていた。

彼女の表情には不安の色が濃く表れていた。目の見えないが故に気配に敏感な長老は、そんなリゲルに気がつくのと、彼女の傍に寄って行って、彼女に手を差し出した。気づいたリゲルは差し出された手を両手でそっと握り締めた。

「怖いか、リゲル」と長老は言った。

(いいえ、そうではないの、長老様)とリゲルは心のなかでだけ呟いた。

それを言葉にしたところで、今更どうにもなることではないと分かっていたからであった。

実際、リゲルのなかには恐怖心はなかった。逆に、この闘いで命を落としてしまったとしても構わないとさえ思っていた。

ただ彼女は、星喰いを封印するという自分の選択に自信を持つことができないのだった。そして、自分が本当に星喰いを封印することができるかについても同様だった。

彼女は自分がそう感じる理由について、うすうす見当がついていた。

しかしそれを認めることは、この闘いに赴く者としては、あってはならないことであった。

長老は、少女が不安を抱いていることを感じ取りはしたが、彼女の内面の葛藤にまで気づくことはなかった。彼は、実の孫のように愛おしい娘がこれからの戦いに赴くことに恐怖心を抱いているのだと思いこんでいた。

「本当にすまない。お前にこんなことを頼んでしまって。しかし、分かってくれ。お前しか頼める者はいなかったのだ。お前はただ、弱った悪霊を封印することに専念すればよい。悪霊と闘うのは、他の者たちがやってくれるからの。ベテルギウスや、リゲルを最後まで守り抜くのじゃぞ」

「勿論です、長老様」ベテルギウスは自信に満ち溢れた声音で返答した。長老は彼の返答に大変満足したようだった。深く二度頭を縦に振ると、リゲルが握り締めているのとは反対の手をベテルギウスに差し出した。彼もまた、リゲルと同様に長老の皺のよった手を両手で握り締めた。

「それでこそ、星降りの地の男じゃ。後は頼んだぞ。行け、若者たちよ。何としてでも悪霊を封印するのじゃ」

星喰いのいる場所は、長老の占いによって割り出されていた。占いでは、リゲルが気に入っていた場所——星喰いが封印されていたあの場所に、封印すべき相手はいると出ていた。

血気盛んな若者たちは、手に手に武器を持って、沈黙したまま闘いの場を目指した。村の者たちは、不安げな面持ちで彼らを見送っていた。

村はずれの森のところまで来ると、若者たちのなかに若干躊躇いを見せる者が現れた。しかし、そんな者も他の者が発する雰囲気感化されて、すぐに立ち直った。部隊は怯まず森の奥へと足を踏みだした。

森はそれ程広くはないので、目的地に着くのにそう時間はかからなかった。着くや否や、あらかじめ打ち合わせておいた通りに彼らは散らばった。

リゲルはそっと泉に近づいた。ベテルギウスが彼女のすぐ後ろをついてきた。

「リゲル、勝手な行動は命とりになる。悪霊を弱らせるまでは、僕らの傍を離れないで」

青年に気づかれぬように、リゲルはそっとため息をついた。

「分かってる。ただ、ちょっと封印する場所を確認しておきたくて」

とりあえずそう言ってはみたものの、彼女の本心は違うのだった。ベテルギウスに促されて皆のところに戻る途中、リゲルは二、三度泉の方を振り返った。

(あれが、あのひとが封印されていた泉だなんて……)

皆のところに戻ると、リゲルの周りにはすぐに、ベテルギウスも含め護衛役の男が三人集まった。彼らの行動にリゲルは内心うんざりしていたが、流石に口に出すことはしなかった。

(私は、本当にあのひとを封印できるのかしら)

静かな水面を男たちの間から眺めながら、彼女は思った。

(あのひとは本当に、悪霊なのかしら)

不意に不安になって、リゲルは腰に収めた剣の柄を片手で握った。強く握り締めたので、剣がどくりと脈を打ったように感じられた。不安が大きくなって、リゲルは剣を見やった。彼女が剣に視線をやったその時、静かであった水面が、揺れた。

「村に帰るがいい、人間たちよ」

どこからか低い声が聞こえてきたので、人間たちは各々武器を構えて戦闘態勢に入った。

「どこだ！ どこにいる！ 悪霊よ！」

出て来い、と若者たちが口々に叫ぶ。リゲルははっとして周囲を見回した。しかしどこにも、声の主の姿は見えなかった。

リゲルの周囲を固める男たちが、剣を抜いて構えた。本能のようなもので、自分たちの対峙する敵が近くにいることを感じとったようだった。

リゲルは不安をはっきりと顔に表して、剣の柄を両手で握った。剣が、早く自分の役目を果たしたくてうずうずしているかのように感じられた。

お前のしようとしていることは決して間違いではない、と剣が言っているようだった。

本当に？ と心のなかでリゲルは剣に問う。

本当に私は間違っていない？

剣は答えなかった。

「出たぞ！ 星喰いだ！」

リゲルははっとして顔を上げた。森の木々の間から、巨大な黒猫の頭が覗いていた。

男たちは黒猫に向かって、自分の身長程もある大きな弓を力強く引いた。矢は真っ直ぐ黒猫に向かっていった。猫は避けようとしたが、何本もの弓矢がその巨大な頭に突き刺さった。

そのうちの一本が、右目に刺さった。リゲルはあっと思わず声を上げそうになったが、慌てて両手で自分の口を押さえて声を押し込めた。負傷した猫は奇声を発しながら、泉に背を向けて走り去った。猫が走るたびに大地に振動が走った。

「まずいぞ！ 村の方に向かってる！ こちらに追い返すんだ！」

男たちは口々に何かを叫んで猫の後を追っていった。

「封印はこの場でないとできない！ リゲル！ 君はベテルギウスとここに残るんだ！ あの怪物はすぐにこっちに引きずり戻してやる！」

「ベテルギウス！ リゲルを頼んだぞ！」

「分かった！」

護衛の男二人が、他の者たちの後を追って走り去った。後に残されたのはリゲルとベテルギウスの二人だけであった。

リゲルは不安をもう隠そうともしないで、男たちが、いや、黒猫が走り去った方向を見つめていた。

まるで心臓が首元まで上がってきたかのように、リゲルには自分の鼓動がやけに大きく聞こえた。心配で心配でたまらなかった。

いまや、彼女は自覚しつつあった。自分の本当の気持ちを。

「リゲル、君のことは僕が守りきるよ」

すっかり青ざめているリゲルを安心させようと、ベテルギウスは言った。リゲルは力なく首を横にふって俯いた。リゲルがあ怪物を見て怯えてしまったのだと勘違いした青年は、彼女の肩に両手を置いて再び優しく話しかけた。

「怯えることはない。僕がいるんだから」

「……違うの……」

俯いたまま、リゲルは言った。

「え？ 今何て？ ごめん、聞こえなかった」

リゲルはもう一度首を横に振った。

「だから、違うの」

リゲルの言葉の意味が分からず、ベテルギウスは戸惑った。眉を顰めてリゲルの両頬に手をあてがい、上を向かせる。彼女の両の目は今にも涙が溢れそうになっていた。ベテルギウスは困惑して口を開いた。

「何が違うんだい、リゲル？ 化け猫が怖いんじゃないのかい？」

「彼のこと、怖くなんてないわ！」

リゲルはベテルギウスの両手を荒く振り払った。今や彼女の頭のなかは、星喰いのことでいっぱいだった。彼が深手を負っていないか、それだけが心配であった。

自分が間違っていたのだ、とリゲルは思う。

自分が、自分自身を裏切った。こんなことになるまで気づかなかったなんて。

今更後悔してももう遅い。腰の剣は封印できるときが来るのを今か今かと待っている。

私はなんて愚かだったのだろう。どうして、彼のことを信じてあげられなかったのだろう。

たとえ彼が本当に自分を騙すつもりであったのだとしても、信じればよかったのだ。

信じて信じて、信じ尽くす。

そうすればいつの日か、騙すことが馬鹿らしくなるときが来ただろう。

今は亡き父が、自分に言ったことを彼女は思い返していた。

信じる力に勝るものはない。信じればどんなことも可能となる。

どんなに悪い心だって、全幅の信頼をおかれればやがて浄化されていく。

信じる心が大切なのだ——父は確かにそう言った。

(私は、彼のことを信じるができなかった)

自分の部屋で最後に会ったあの時の、星喰いの憂いを帯びた瞳が、どこか寂しそうな表情が、脳裏に蘇った。あれは、自分がさせたのだ。自分が、彼を信じるができなかったから。

居ても経ってもいられず、リゲルは村に向かって走り出した。

「リゲル！」

突然のことだったので一瞬出遅れたが、ベテルギウスも彼女の後を追って走り出した。あっという間に足の遅いリゲルは青年に追いつかれた。訳が分からないながらも、ベテルギウスは彼女の腕をつかんでひきとめた。

「嫌！ 離して！」

「リゲル！ 一体、どうしたっていうんだ！」

「お願いだから離して！ 彼の元に行かせて！」

「リゲル！ 落ち着」

ベテルギウスの言葉が途中で途切れた。そしてそのまま、リゲルの方に倒れこんできた。

思わぬ展開にリゲルは驚いてしまったが、必死で彼の身体を支えた。

しかし鍛え抜かれた男の身体は彼女には重く、とても支えきれるものではなかった。

結局、支えきれずに彼女は地面に後ろ向きに倒れこんだ。彼女の身体の上に、ベテルギウスのたくましい身体が覆い被さった。

重みに彼女は呻いた。そんなとき、不意に聞きなれた声が耳に飛び込んできた。

「おいおい、大丈夫か？」

声がしたかと思うと、身体にかかっていた圧力がなくなった。

彼女は目を見開いて、自分を助けだしてくれた相手を見つめた。

相手は彼女の顔をきよんとした顔で見つめたかと思うと、おかしように笑いだした。

「なんだその顔は。面白い顔もできるんだな、お前」

「星喰い！」

リゲルは黒髪の子の胸に飛び込んだ。そして背中に腕をまわすと、ぎゅっと力をこめて抱きついた。驚いた星喰いは一瞬固まったが、恐る恐る彼女の肩に手をやると、そっと彼女を自分から外そうとした。

が、リゲルがあまりにもきつくしがみついているので、その程度の力では外すことができなかった。

「……これはどういうことだ？」

彼女を外すのを諦めた星喰いは、困ったように頬を掻いた。星喰いにしがみついたままのリゲルは、声を漏らさずに泣いていた。

「ごめんなさい、星喰い。貴方を信じることができなくて……」

かすかに震える声で、彼女は言った。

「私がばかだったの。貴方のこと、疑ったりして。私が貴方のことをちゃんと信じていれば、こんなことには……」

そこまで言って、彼女は大切なことを思い出した。

「そうだ星喰い！ 怪我は！？」

彼女は慌てて星喰いから離れて、上から下へと彼の身体を隈なく見やった。

背中にもまわって調べてみたが、不思議なことにどこにも怪我をしたような跡はなかった。ただ、右の耳に古傷があったが、それは今回の件でついた傷ではなさそうだった。

「どうして……？ あんなに矢が刺さっていたのに」

「矢？」

一瞬不思議そうな顔をした星喰いだったが、ああ、と思い出したらしく呟いた。

「あれは、まやかしだ」

「まやかし？」 訳が分からず眉間に皺を寄せて問う。星喰いは軽く頷いた。

「お前が先程見た黒猫、あれは、俺ではない。ニセモノだ」

「ニセモノ……」

リゲルは脱力して、その場にへなへたと座り込んだ。

「ど、どうした……？」

突然しがみついたり座り込んだり、なにかと忙しいリゲルに戸惑い、星喰いは屈みこんで彼女と視線を合わせようとした。リゲルは俯いていたが、彼が屈みこむと、いきなり顔をあげて相手を正面から睨みすえた。

「心配するじゃない！ ばか！ ややこしいことしないでよ！」

ぼかんとして星喰いは彼女を見つめる。リゲルはすくっと立ち上がって、ぼろぼろとこぼれる涙をそのままに、両の手を握り締めた。

「私がどれだけ貴方のことを心配しているの！ し、死んじゃうかと、思ったんだからっ……！」

そこまで言うと、彼女は声をあげて泣き始めた。すっかり呆気にとられていた星喰いは、しばらく屈んだまま彼女を見上げていたが、はっと我に返ると立ち上がって、彼女をそっと抱き寄せた。

リゲルは抵抗せず、そのまま泣き続けた。

星喰いは、背中にまわした手で彼女の背をぼんぽんと優しくたたき、彼女が落ち着くのを待った。

彼女は星喰いの胸に顔を押し付けて泣き続けた。静かな森に、リゲルの泣き声が響いた。

「ありがとう」

気の済むまで泣いたリゲルは、ぐずぐずと鼻を吸りながら礼を言った。目は真っ赤になっていた。

ポケットから取り出したハンカチで鼻を押さえ、彼女は星喰いから離れようとした。が、それはできなかった。

彼女は不思議に思って上を見上げた。星喰いは、真剣な表情で彼女を見下ろしていた。彼には、確かめたいことがあった。

「お前は、俺を信じるというのか？」

彼の言葉に、彼女は何を今更、と呆れた表情を作った。先程の自分の言動で、その問いに対する答えは示したつもりであったのだ。

「勿論、信じるわ。貴方は悪霊なんかじゃない。星を食べるのだって、必要に迫られてのことだって」

彼女の言葉を聞くと、そうか、と星喰いは呟いた。そして暫く何か考え込むような素振りを見せたかと思うと、唐突に満面の笑みを浮かべた。

月の光に照らされた彼の笑顔は、どこか幻想的であった。リゲルは彼に見とれた。

「俺は、お前に惚れ直した」

「は？」

「やっぱり、お前はいい女だ。俺の目は間違っていなかった」

そう言って、彼は彼女を抱きしめる力を強くした。ちょっと、というリゲルの声を無視して、彼は満足げだった。抱きしめながら、彼は嬉々とした声で言った。

「さあ、すぐにこの地を離れるとするか」

「え？」

意味が分からずリゲルは問い返したが、星喰いは笑顔のまま答えなかった。

そして戸惑う彼女をひょいと抱え上げ、伸びたままのベテルギウスをその場に放置して地を力強く蹴った。少し怖くて彼女は星喰いの首にしがみついた。

「ちょ、ちょっと星喰い」

抱えられたまま、枝から枝へと飛び移る星喰いにリゲルは必死に声をかけた。

「どうして星降りの地を離れるなんていうのよ。私はここを離れるわけにはいかないわ」

彼女の顔をちらと見やっ、星喰いは答えた。

「この地に留まれば、お前まで危険にさらされるからだ」

「危険、ですって？」風圧に負けまいとリゲルは声を張り上げた。「どういうことよ？」

「今、村は他の街からの軍勢によって攻められている」星喰いは冷静に言った。

「だから俺はまやかしを使って、精鋭たちを村に戻した。今頃、やつらと戦っていることだろう。まあ、星降りの地が陥落するのも時間の問題だろうがな」

「何ですって！？」

星喰いの言葉の意味を理解すると、リゲルは暴れ始めた。「降ろして！」

先程までは大人しく抱かれていたリゲルが突然暴れだしたので、咄嗟に反応できず、星喰いはバランスを崩して枝から足を踏み外した。

そのまま二人は地に墜落する。

星喰いは何とかリゲルを庇うことに成功した。地に足がつくや否やリゲルはすぐさま星喰いから降りた。星喰いは起き上がると呻きながら眉間にしわを寄せて言った。

「危ないだろう！」

「今すぐ村に戻るのよ！」

リゲルは星喰いに負けじと叫んだ。彼女の気迫に星喰いが負けた。

「どうして村が危険にさらされている時に、のうのうと自分一人だけ助かろうなんて思えるのよ！ 私は村に帰る！村を守らなくちゃ！」

リゲルは立ち上がって村の方角を見やった。彼女の顔には、決意が満ち溢れていた。

「星喰いは皆のために存在するのよ。私たちが村を守らなくちゃ」

そして彼女は、気圧されっぱなしの星拾いに、にっこりと笑いかけた。涙の流れた跡が残った顔には、何の躊躇いも残されていないかった。

「手伝ってくれるわよね、星喰い」

\*\*\*

星喰いはリゲルを背負って村に戻るため森のなかを疾走していた。やろうと思えば、リゲルの言い分を退けて、彼女を連れてこの地を遠く離れることもできた。

しかし彼女のことを思うと、そうもできなかった。

それに、たとえこの星降りの地の人間が、自分を封印した忌まわしい者たちの子孫であったとしても、彼らには何の罪もないのだ。

今夜まさに封印されようとしていたとはいっても、心優しいリゲルと出会った今の彼の内にはもう、人間を恨む気はまったくとっていい程残っていなかった。そのことに気づき、星喰いはリゲルに気づかれないようこっそりと苦笑した。

自分も随分と生易しい生き物になっちまったものだ、と彼は自嘲した。

「ありがとう、星喰い」背中越しにリゲルが言った。彼女は、たくましい背中にそっともたれかかった。

「……どうなっても知らないからな。俺が行ったところで、侵攻を止められるとも限らんぞ」

「ええ」リゲルは険しい顔で虚空をじっと見つめた。「できる限りのことをするだけよ」

二人は森を抜けた。村が見えた。二人の予想に反して、村は物音ひとつせず、ひどく静かであった。風だけが動いているように思われた。

「……どういうこと？」激しい死闘が繰り広げられていることを想像していたリゲルは、顔をしかめて呟いた。

「どうしてこんなに静かなの」

星喰いは彼女の呟きには答えず、その場に立ち止まって周囲を注意深く見回した。

何か、嫌な予感が彼の胸の内では疼いていた。警告のようなものが先程から頭のなかで鳴り響いている。

このまま逃げ帰った方がお前のためだぞと警告は言っていた。村のなかに進めば、お前の命どころか、リゲルまで最悪の事態に巻き込んでしまうかもしれん、と。

「……お前は森のなかに戻れ」

前を向いたまま、星喰いは低い声で言った。

「泉のところへ行って、絶対に村には戻ってくるな」

彼の言葉にリゲルは一瞬きょとんとした表情を浮かべたが、すぐさま眉間に皺を寄せて反論した。

「何を言っているのよ。星拾いの私が、村を捨てて一人逃げられるわけないでしょ」

「そうじゃない」彼はリゲルを地に降ろした。そして彼女の両肩に手を置き、彼女の青い瞳を覗きこんだ。青のなかに困惑の色が入り混じっていた。

「これは、ただの人間同士の争いじゃないってことだ」

リゲルは訝しげに首を傾げた。

「人間同士の争いじゃない……？」

「そうだ。恐らく、精霊が一枚囓んでいる」

彼の言葉に、少女ははっとした。思わず腰におさめた剣の柄を右手で握り締めた。

「その精霊を……封印すれば、いいのね？」

「ああ。お前は聡いな」星喰いはふっと笑った。

「俺が何とかして明け方までに精霊を泉に連れていく。それまで、泉の傍を離れるんじゃないぞ」

これを聞くと、リゲルは不安を顔に浮かべた。

「一人で行ってしまうの？ 私と一緒にいった方が、確実にないかしら？」

「村には強力な睡眠ガスが満ちている。お前みたいな弱い人間が少しでも吸い込めば、一瞬にして夢のなかだぞ」

彼の言葉にリゲルは納得した。眉をひそめたまま心配そうに村の方を見やる。

「こんなに静かだったのは、睡眠ガスのせいだったのね」

星喰いは頷いた。

「今時人間といえども、非効率的で野蛮な、血なまぐさい戦いは好まないんだな」

リゲルは剣の柄から手を離して、星喰いの右手をとって両手で握りしめた。彼女の手は僅かに震えていた。安心させるように、星喰いは彼女の小さな手を握り返した。

「気をつけてね」

星喰いは彼女をそっと抱き寄せた。それからすぐに離れると、彼女に背を向けて村の方に足を向けた。

「明け方までに俺が戻らなかつたら、近くの村に助けを求めに行け。絶対一人でこの村に戻ってくるな」

彼女はしっかりと頷いて、泉に戻るために、再び森のなかに入っていった。それを振り返らずに足音だけで確認すると、星喰いもまた、村に向かって歩いていった。

少女は森のなかを懸命に走っていった。

枝や木の葉でその美しい顔にいくつかが傷がついたが、そんな些細なことに気をとられている場合はなかった。

一刻も早く、泉に戻らなければ。

きっと星喰いがすぐに悪い精霊を連れてきてくれる。自分はその精霊を封印すればいいのだ。

そうすれば、村は助かる。

星喰いは村を救ったことになり、村人たちは彼を封印しようとは思わなくなるだろう。

少女は星喰いを心から信じていた。

状況は必ず好転するに違いないと、信じて疑わなかった。

泉のところに辿りつくのと、先客がいた。まさか誰かがいるとは思わず、リゲルは驚いて荒く息をしながらも木の陰に姿を隠した。

その先客は、リゲルに背を向け、星が散りばめられた夜空を見上げていた。

腰まで届く長い白銀の髪が、風もないこの空間のなかでゆらゆらと優雅に揺れていた。

全体的にクリーム色の光が、彼女を包んでいたから、リゲルにはその先客が人間ではないとすぐに分かった。しかし、敵か味方までかは判断できなかった。

(まさか、このひとが、星喰いの言っていた精霊なのかしら)

もしそうだとしたら、すぐにでも自分が封印しなくてはならない。封印など練習以外にやったことなどないが、星拾

いには星の女神の特別の加護があるという。きっと成功するはずだ。そう信じることでしか、胸に巣食う不安を押さえ込むことができなかった。

自分が、やらなければ。そう決意した、瞬間だった。

「いつまでそこに隠れておるのじゃ？ はよう出ておいで」

「え？ ……きゃっ」

泉の傍に立っていた女性が言葉を発したかと思うと、ぐいと引っ張られる感覚を覚えた。

実際にリゲルの身体が見えない力によって木の陰から引きずり出され、女性のすぐ傍まで勢いよく飛ばされた。

地に落ちるときの衝撃に備えて彼女は両目を硬く瞑ったが、その必要はなかった。彼女の身体はそっと優しく、まるで割れ物を扱うかのように丁寧に地面に下ろされた。

いきなりの展開に驚きながらも、リゲルは相手を観察しようと座りこんだまま上を見上げた。

身体から光を放つ謎の女性は、空から泉に視線を下ろして、神妙な面持ちで立っていた。

その神々しい横顔を見つめているうちに、リゲルのなかに畏敬の念が湧き上がってきた。そしてそれによって、リゲルは相手が何者であるかを直感的に悟ったのであった。

「ほ、星の女神、様？」

リゲルの声に、女性が振り向いた。振り向いたときには、神妙な表情は消え、かわりに微笑みはその美しい顔に浮かべられていた。

「よう来たな、リゲル。星喰いに言われて来たのじゃな？」

鈴のような清らかな声に一瞬聞きほれてしまったが、リゲルははっと我に返ると正座して地に額がつくくらい深く頭を下げた。

「はい。精霊を封印するために、参りました」

「そんなに畏まらんでもよい。頭をお上げ」

言われた通りに彼女は頭を上げて女神を見上げたが、正座したままであった。

そんなリゲルを女神は慈愛に満ちた顔で見つめていたが、不意にくつくつと笑い始めた。リゲルは、女神が笑い始めた理由が分からず、困ったような表情を浮かべる。

「何故お笑いになるのです？ 女神様」

「いや、なに」

女神は相変わらず笑ったまま言った。

「星喰いはまたもやお主に嘘をついたのだな、と思っただけじゃ」

嘘？ リゲルは当惑して黙ったまま女神を見上げた。女神は笑うのをやめて彼女を愛おしそうに見やった。

「一度目は、お主があやつを疑ったとき。あの者は、お主のために、お主を騙しておったと嘘をついた」

リゲルの顔に苦渋の色が浮かんだ。それすらも、女神は愛おしそうに、満足げに見つめていた。

「二度目は、つい先程のこと。あやつは今回の侵攻に精霊が一枚噛んでいると言った。あれは、嘘じゃ」

「……！」

途端、少女はさっと青ざめた。女神は構わず言葉を続ける。

「お主と別れた後じゃろう、星喰いから思念が飛んできてな。お主をここで守ってくれと頼まれたのじゃ。あやつはお主を守りたい一心で、村から引き返させたのじゃな」

そんな、まさか。リゲルは血の気が失せる思いで女神の顔を見つめ返した。居てもたってもいられず、無礼を承知で立ち上がって駆け出した。

しかし広場となっている空間の端まで来ると、見えない何かに弾き飛ばされた。驚いて声も出なかった。リゲルは呆然と前方を見やった。

「無駄じゃ」女神は哀れむような声でリゲルの小さな背中に呼びかけた。

「結界を張っておる。生身の人間では、破れんぞ」

リゲルは振り返って、再び頭を下げた。

「お願いします、女神様。どうか、彼の元に行かせてください」

女神は彼女に頭を上げるよう言ったが、リゲルは女神に逆らって上げようとはしなかった。女神はため息をついて言った。

「それはできぬ。それでは、星喰いの想いを無駄にしてしまう」

「……そんなに、危険な目に合っているのですか、彼は」

ぱっと勢よく顔を上げてリゲルは問うた。女神は、彼女の大きな瞳からぼろぼろととめどなく溢れてくる涙を見て、暫く思案した後再び泉に視線を落とした。

泉には変わらず夜空が映し出されているだけであったが、女神の目にはなにか別の光景が映っているようであった。

「今は猫の姿になって戦っているようだが、なんといっても数が多すぎるからな。苦戦しておる。睡眠ガスもあることじゃし」

「精霊にも睡眠ガスが効くんですか？」

「まあ、人間程ではないし、人間の場合とはまた受ける効果が違うが……。あやつは肉体を持っておるからな。睡眠ガスによって穢れた空気は、肉体をもつ精霊にとっては毒じゃ」

リゲルの顔はますます青ざめた。

大切なひとが危険な目にあっているときに、自分はこうして待つことしかできないのか。

自分の生まれ育った大切な故郷が攻め落とされようとしているまさにそのとき、自分ひとりだけ女神の加護を受けて守られていてよいものか。

星喰いは村のためにあるのに。村人たちのためにあるのに。

こんなところで、ただ待っているだけではいけない。自分から飛び込んでいかなければ。

リゲルのなかで、決心がついた。

彼女は口を真一文字に引き結んで涙を拭うと、剣の柄をぐっと握った。

そして力をこめて鞘から剣を引き抜いた。刀身が女神の放つ光を受けて金色に輝いたように見えた。

見よう見まねで剣を構えると、リゲルは目の前の一見何もない空間に思い切り切り付けた。

しかし、剣は、切りつけたのと同じ力で結界によって弾き飛ばされた。もう一度切り付けた。結果は同じであった。

もう一度、更にもう一度。

リゲルはやけになって、叫びながら滅茶苦茶に剣を振り回した。

「人間の剣ごときで破れる程、わらわの結界は脆くないぞ」

泉に視線を落としたまま、女神は言った。

「諦めなさい。明け方までは、わらわがお主を守ろう。その後は、その時の状況次第じゃな」

「諦めません！」

リゲルは叫んだ。

「どうか、ここから、出してください！ 皆が危険な目に合っているときに、私一人がぬくぬくと守られているわけにはいきません！」

リゲルは叫びながらも結界に向かって剣を振り下ろし続けた。

「私は、星拾いです！ 星拾いである前に、一人の、人間です！」

少女は剣の柄を逆手に握った。切っ先を結界に向けた。

「大切なものを、自分の手で、守らせてください！」

渾身の力を込めて、リゲルは剣を振り下ろした。女神がはっとして少女を振り返った。

電撃が走ったような、何かが壊れるような音が虚空をつんざいた。

激しい風が起こり、木々が怒ったようにわさわさと揺れた。少女の軽い身体がまたもや飛ばされた。

悲鳴を上げるまもなく、リゲルは泉のなかに落ちた。大きく水しぶきが上がった。

「なんと……」

女神は驚いた表情で、泉のなかから這い出してきた少女を見つめた。

「わらわの結界を、破るとは……」

全身ずぶ濡れになってしまったが、少女は気にした風もなく勝ち誇った表情を浮かべていた。剣はしっかりと右手に握りしめたままであった。リゲルは女神に満足げに笑いかけた。

「では、行って参ります」

「お待ちなさい」

まだ何かあるのかとリゲルは構えた。女神はしずしずと少女の元に歩み寄って、少女の手をとるとなにかの器具を手渡した。それは、ガスマスクであった。

少女は驚いて女神を見上げた。美しい女性は、慈愛に満ちた微笑をたたえていた。

「これを持ってお行き。役に立つじやろうて」

「女神様……」

リゲルはありがたくガスマスクを受け取った。そしてそのまま装着にとりかかった。

「かわりに」少女がガスマスクを装着したのを確認すると、女神は口を開いた。

「お前の服のポケットに入っている、それをわらわにおくれ」

ポケット……？何かあったかしらと不思議に思いながらも、ポケットをまさぐってみると、固いものが指先に触れた。取り出してみると、それは小さな箱だった。ベテルギウスから受け取ったものだった。

「ただの、指輪ですけれど」とリゲルは女神にその小箱を手渡しながらくぐもった声で言った。

分かっておる、と女神は頷いた。受け取った指輪を手の平の上に置いて、その上にもう片方の手を置いて挟んだ。次に手をのけたときには、手の平の上には何ものっていないかった。

「さあ、早くお行き。わらわはもう、お主を止めはせん。お主が自分で選んだことなのじゃからな」

「はい」

ありがとうございます。髪から、衣服から水を滴らせたまま、リゲルは深く頭を下げた。

そして、僅かな間も惜しいとでもいうように、急いでその場から走り去った。

その小さくともしっかりとした後姿が闇のなかに消えていくのを、女神はどこか微笑ましい気持ちで見送った。

「人間というのはやはり、愛おしいものじやのう」

そう言うと同時に、光と共に女神の姿がふっと掻き消えた。

村に戻って目の前の光景を見るや否や、リゲルは絶句した。あちらこちらに血を流した人間が転がっており、家々からは炎があがっていた。

固まってしまいそうな足を叱咤し、リゲルは村のあちこちを走りまわった。巨大な猫の姿で戦っているならすぐにも見つかるだろうと考えていたのだが、なかなかどうして星喰いの姿を見つけることはできなかった。

どうすればいいのか分からず、物陰に隠れながらリゲルは途方に暮れた。

その時、地を揺るがすような大きな音が辺り一帯に響いた。はっとしてリゲルは顔を上げる。

耳を澄ましたが、先程の大きな音がもう一度聞こえることはなかった。代わりに、大勢の人間の雄たけびのようなものが耳に飛び込んできた。

まさか、と嫌な予感に胸がざわついた。音が聞こえてきたのは、神殿のある方角だった。

長老になにかあったのかもしれない。いや、この状況で、何もない方がおかしいというものだ。リゲルは建物の影に身を潜めつつ、慌てて神殿の方に向かった。

時折、侵攻してきた軍の人間に見つかりそうになったが、女神のご加護か、毎回すんでのところまで難を逃れた。小さな村なのですぐに神殿に向かえるかと思っていたが、状況が状況なのでそういう訳にもいかなかった。

敵を何とかやり過ごしながら、リゲルは剣の柄をしっかりと握って影から出るタイミングを計っていた。

今や彼女の腰には、剣が二本おさまっていた。一本は勿論封印の剣であったが、もう一本は、申し訳ないと思いつつ、吐きそうな思いで地面に転がっていた死体から拝借したものだった。封印の剣は戦闘向きではないのだ。

建物の影から影へと移りながら、リゲルは着実に神殿に近づいていた。もう、神殿が目と鼻の先にある、そこまで来た時だった。

「ひっ……」

後ろから誰かに肩をつかまれた。悲鳴をあげそうになったが、背後から伸びてきた手に口を塞がれたため、大きな叫び声が周囲に漏れることはなかった。少女は震える手で剣の柄を握り直し、鞘から引き抜こうとした。

「リゲルッ！ 落ち着け！ 僕だよ、僕。ベテルギウスだ」

くぐもってはいたが聞き慣れたその声に、リゲルは思わず柄から手を離した。そして後ろを振り向くとそこには、赤々と燃える炎に照らされた、見慣れた姿があった。

「ベテルギウス！」リゲルははっとして安堵のため息をついて言った。「無事だったのね！」

「ああ。僕も、それから長老様も」

ガスマスクをした彼が後ろにちらと目をやると、彼の背後には小さな老人がいた。老人もまたマスクをつけて、睡眠ガスに備えていた。

「長老様！ よかった……」

「リゲルや」

長老は片手を伸ばした。リゲルは慌てて彼の震える手を握った。

「一体、何が起きているのか……。星喰いの封印どころではなくなったことは確かなのじゃが」

光を失った無力な老人は、突然混乱に巻き込まれてどうしてよいのか途方に暮れているようだった。彼の小さな姿を見て、逆にリゲルは自分がしっかりせねばと感じるようになった。リゲルは真剣な顔で長老とベテルギウスを交互に見やった。

「そうです。封印どころではありません。星降りの地は、今、他の街からの襲撃を受けているのですから」

「何故……」ベテルギウスは困惑した顔でリゲルを見つめた。対して長老は、はっとした表情でリゲルのいる方に顔を向けた。

「星を狙ってか」

「ええ。恐らくは」

「そんな……」青年は呻いた。「僕らは一体、どうすればいいんだ」

リゲルが咄嗟に口を開いた。

「今、星喰いが、私たちのために戦ってくれているはずだわ」

「なんだって」ありえない、とベテルギウスは声を抑えて叫んだ。

「どうして星喰いが僕らを助ける？ やつは悪霊だぞ！？ 僕らはやつを封印しようとしていたじゃないか！」

「星喰いは悪霊なんかじゃないわ！」負けじとリゲルは叫び返した。驚いたベテルギウスが彼女を落ち着かせようとしたが、彼女は空いたほうの手で彼の手を振り払った。

「リゲル」長老はわなわなと震える声を発した。若い二人は長老の方に視線を戻した。

「お前さん、まさか。星喰いを」

「おっと、こんなところにもまだいたぞ！」

三人は互いに顔を見合わせた。

すぐさま声の聞こえてきた方に視線をやると、敵軍の者たちがぞろぞろとやってきたところだった。

リゲルは恐怖のあまり長老の手を両手で硬く握りしめた。

ベテルギウスが二人の前に立ち上がり、剣を抜いて、構えた。リゲルの胸元で、星拾いの証である、星の女神を象ったペンダントが揺れた。炎の光を受けて、ペンダントが輝いた。

「おい、一人、星拾いがいるぞ！」ペンダントに気づいた男が叫んだ。彼はいやらしい目つきで怯えるリゲルを見やっ

た。ベテルギウスが男の視線からリゲルを守るように立った。男は不満そうにベテルギウスを見やっ

たが、すぐに後ろにいた仲間に視線を移した。仲間は彼の背中をどんと叩いた。

「やっと見つけたか！ どの村にも最低一人はいるはずなのに、なかなか見つからなかったな」

「どうするんだ？」別の男が仲間に尋ねた。

「そりゃあ、捕虜にするに決まってるだろ。星拾いは色々と役に立つ」

「さっきから黙っていれば、何を勝手なことを言っている！」いきり立ったベテルギウスが剣を構えたまま叫んだ。

「星拾いは渡さない」

ベテルギウスの言葉に、男たちは腹を抱えて笑った。

「渡さない、だとよ。お前一人で一体何ができる？ たった一人で、そんな老いぼれと女を守るつもりか？ 笑わせる」

男たちはひとしきり笑った後、次々に剣を抜いた。炎の光を受けて刀身が赤々と気味悪く光った。リゲルは長老を庇うようにして曲がった背中に手をまわした。長老はもぐもぐと口を動かして、祈りの言葉を捧げていた。

先に動いたのはベテルギウスだった。

ベテルギウスは声を上げながら一番前にいた男に切りかかった。

男は大柄な体格の割りに身軽な動きで襲ってきた剣をよけた。そして仕返しといわんばかりに、体勢を崩しかけたベテルギウスに剣を突き出した。ベテルギウスはすんでのところで身をかわした。

一対一ならまだ勝機はあったかもしれない。

しかし、残念ながら、そんな対等な関係はここでは望めなかった。

敵の男たちは次々とベテルギウスに襲いかかった。あっという間にベテルギウスは男たちに囲まれてしまった。

剣は必要ないとも思ったのか、男たちは剣をおさめた。それでも決着がつくのにそう時間はかからなかった。

血にまみれたベテルギウスが動かなくなると、男たちは彼に興味を失い、次々とリゲルに視線を向けた。どれもこれも嫌らしく、汚らしい視線だった。リゲルは悪寒に身を震わせた。

「なあ」男の一人が言った。

「いい女じゃねえか。ただ捕虜として連れていくのは勿体ないぜ」

「そうだな」と彼の仲間が同意した。

「ちょっとくらい、楽しませてもらおうじゃないか」

男たちは互いに何かを言い始めた。どうやら、順番を決めているようだった。

リゲルは恐怖のあまり腰が抜けかけていたが、勇気を振り絞ってその場からこっそり、長老と共に逃げ出そうとした

。

しかしそれは叶わなかった。



「おっと、逃げようたってそうはいかないぜ」

いつの間にか、男が一人、背後に回っていた。リゲルは声も出せなかった。

何とか抵抗しようと剣を抜いたが、その剣は簡単に振り払われてしまった。

男は邪魔だと言わんばかりに長老を突き飛ばし、リゲルの細い腕を掴んだ。

長老はよろけて地面に倒れこんだ。それを見て、彼女は暴れようとしたが、すぐさま壁に押し付けられた。男は片手で、リゲルの両手首をまとめて壁におさえつけ、もう一方の手は腹にあてがっていた。

もうどこにも逃げ道はなかった。

せめて、せめて長老様だけでも。

「お願い……せめて、長老様だけでも見逃して……」

必死の思いをこめてか細い声でそういったが、男は鼻で笑った。

「お前が大人しく俺たちの言うことを聞くんなら、考えてやらんこともないぜ」

その返答で、リゲルは自分の希望が叶えられないことを悟った。目の前が真っ暗になるような想いだった。

(星喰い……)

恐怖で目から涙が溢れてきた。リゲルは男から顔を背けて、愛おしいひとを思い浮かべた。

「おい、順番抜かすなよ。最初は俺だぜ」男の一人が、リゲルを押さえつけている男に言った。

「分かってるさ」

(助けて……)

リゲルは目を閉じた。自分一人の力ではもうどうしようもなかった。

その時、すぐ近くで男の呻き声が聞こえた。

恐る恐る目を開けると、自分を壁に押さえつけていた男の胸から矢じりが突き出ていることに気がついた。

男の身体がぐらりと自分の方に傾いだが、もう一発横から凄まじい勢いで飛んできた矢によって、すぐさま横に倒れた。何が起ったのか分からず、リゲルはとめどなく涙が溢れる目を瞬いた。

「貴様ら」

怒りに満ちた声が辺り一帯に響いた。

「穢れた手で俺の女に触るな」

「だ、誰だ！」

男たちが剣を構えて周囲を見渡した。

しかしどこにも声の主と思われる姿はない。彼らの表情に、僅かに恐怖と焦りの色が浮かんだ。かわって、リゲルは自分のうちに力が湧いてくるのを感じていた。

上方から何かの気配を感じ、男たちは上を見上げた。

しかし、時すでに遅し、見上げた瞬間にはもう既に、彼らは巨大な身体によって押しつぶされていた。つぶされるのを免れた男たちは、巨大な尻尾によって燃え盛る壁にたたきつけられた。

慌ててリゲルは目を閉じて顔を背けたが、地獄から生じてくるような不気味な悲鳴から耳を守ることは叶わなかった

。

これなら見ても見なくても一緒だといわんばかりに、彼女はすぐさま目を開けた。

「星喰い！」

リゲルは巨大な黒猫に駆け寄った。彼女が傍に来る頃には、黒猫の姿は消え、かわりに一人の青年の姿が同じ場所にあった。リゲルは彼の胸に飛び込んだ。彼は彼女を優しく抱きとめた。

「リゲル……。無事で、よかった」

「星喰いも」リゲルは今更ながら身体がひどく震えるのを感じていた。星喰いの顔を見た瞬間に安堵と共にどっと先程の恐怖が蘇ってきたのだ。

涙は止まっていたが、身体の震えは一層強まった。

星喰いはあやすように彼女の背を優しくさすり、彼女が落ち着くのを待った。

彼女の震えがあらかた治まると、星喰いは彼女をそっと自分からはがして言った。

「馬鹿だな。何故村に戻ってきた。俺の言うことを聞いていなかったのか」

「ちゃんと聞いていたわ！でも貴方が心配で心配で、いてもたってもいられなかったのよ！」

そこまで言って、リゲルは彼の身体がぼろぼろであることに気がついた。

「星喰い、貴方……ひどい怪我してるじゃない！」

「これぐらい、大したことはない」

言っている傍から、星喰いの身体がよろけた。彼は舌打ちをしながら、燃えていない壁に手をついた。

リゲルは心配そうに彼の身体を調べた。あちこちから血が流れており、人間であったなら、とっくに命はなかったであろうと思われるくらいの大怪我であるように彼女には感じられた。

彼はさり気なく自分の腕で腹の傷を隠した。が、その時にはもう既にリゲルはその傷を見つけていた。腹の傷が一番深そうであった。

「リゲルや……」

「！ 長老様！」

地面に手をついて座りこんでいた長老が、不意に彼女に声をかけた。リゲルは星喰いが心配であったが、彼が顎をしやくって行けと促すので、長老の元に駆け寄った。

「長老様、大丈夫ですか？」

「わしは大丈夫じゃ。それより、お前の方は」

「私も大丈夫です。何もされていませんから」

彼女の言葉を聞くと、長老はよかったよかったと呟き、祈りの言葉を捧げた。しかしそれで老人の不安の種が全て回収されたわけではなかった。

「ベテルギウスはどうなったのじゃ」

リゲルの顔が曇った。先程の残酷な光景が脳裏に浮かんだ。

彼女は真実を言うのを躊躇ったが、長老に嘘が通用しないことは分かっていたし、嘘をついたところで、どうにもならないことも分かっていた。

「彼は……」

殺されました。

その一言がこれ程に重いものだと、現実には体験してから初めて知った。

頭では勿論、人の命は尊いものだと分かっていたが、頭で理解しているのと実際に体験するのでは全然違った。

再び溢れそうになる涙を必死で堪えて、彼女は震える声を発そうとした。しかしその必要はなかった。

「こいつはまだ生きてるぞ」

「えっ？」

振り返ると、星喰いが血まみれのベテルギウスの上に屈みこんでいた。鼻の下に指を持っていき、呼吸を確認しているようだ。

「息がある。傷も、致命傷になるものはなかったようだ。とりあえず止血はしなければならないだろうが……こいつは運がよかったのだな」

確かに、運がよかったのだろう。男たちが皆もし剣を抜いていたら、確実にベテルギウスの命はなかった。そう思うと、リゲルは安堵すると共に再び恐怖を感じた。

リゲルの支えを借りて立ち上がると、長老は星喰いの傍に連れていくようリゲルに頼んだ。

彼女は一瞬躊躇ったが、星喰いが面白そうにこちらを見ていたので、連れていってもいいのだと判断し、老人の望むままにした。傍まで来ると、老人は星喰いのいる辺りにもはや失われたはずの視線を向けた。

「そこにおるのは……星喰いか」

「ああ、そうだ」

短い沈黙が流れた。炎が建物を飲み込んでいく音だけがその場に聞こえていた。老人は青年のいる辺りに険しい顔を向けていた。そんな老人を、青年は面白そうに見上げていた。二人共自ら口を開く素振りは見せなかった。

リゲルは不安になって口を開いた。

「長老様。星喰いは悪霊なんかじゃないのです。彼は村を守って、」

「リゲルは黙っておいで」

いつになく厳しい口調で長老は言った。その気迫に負け、リゲルは黙りこんだ。

「お主は、確かに村を救ったようじゃな」と老人はため息をつきながら言った。星喰い自身は何も言わなかった。ただ黙って老人を見つめていた。

「しかしそれは、リゲルのためであろう。真に村を想ってのことではないな」

「だとしたら、どうする？」

楽しむような口調で星喰いは尋ねる。彼の手が腹を押さえるのを、リゲルは見逃さなかった。

顔にはいまだに面白そうな表情が浮かんではいたが、額には汗が浮いていた。

「別にどうもせん」と老人は言った。

「ただ、礼を言おう。戦ったことには違いがないのだから。戦ってくれて、感謝する」

リゲルは驚いて長老を見やった。星喰いは相変わらず心情の読み取れない、面白がるような表情を浮かべていた。

長老は、占いで全てを知っていたのだ。そしてこれからのことも知っているに違いなかった。そして長老は自分が占いで知ったことを、口にした。

「お前さんの命は、もう残り僅かのような」

「！ そんな！」

「……」

ここに来て初めて、星喰いは無力な老人を睨んだ。しかしそれでは視力を失った老人を怯えさせ、口を閉じさせることはできなかった。

「人間であったならば、とっくの昔に命を落としておる。ひどい深手をお前さんは負っておる。お前さんだから、ここ

まで生きながらえたのじゃ」

老人は続けた。

「わしにはもう、お前さんを救うことはできんが……。せめて、お前さんの魂を弔うことくらいはさせてもらおう」

「長老様！」

リゲルは長老に縋った。

「何とか……何とかありませんか！？ 彼を救ってください！ お願いします」

「まだ死んでな」

「喋らないで！」リゲルはぴしゃりと言った。星喰いは彼女に気圧されて口を噤んだ。

少女が星喰いの腹の傷を見ようとすると、青年は少し抵抗を見せたが、もう既に力があまり残されていないようだった。

リゲルは呆気なく彼の腕を腹からどけることに成功した。

腕の下に隠れていた深い傷を改めて確認すると、リゲルの目頭が熱くなってきた。医学の知識のない自分をこれ程恨めしく思ったことはかつてなかった。

(星の女神様……) リゲルは心のなかで祈った。

(どうか、どうかお助けください。星喰いの命を、救ってください。村を、救ってください)

胸元のペンダントを両手で握り締めた。握り拳の上に、澄んだ涙が零れた。

(お助けください……！)

女神は泉のほとりに静かに佇んで、水面を見つめていた。

一見すると、水面にはただ白んできた空が映っているようにしか見えなかったが、女神にはちゃんと、村の様子が見えていた。

星降りの地は今にも陥落しようとしており、星喰いは気丈に振舞ってはいるが、命のほうはもうすぐ尽きようとしていた。

そして、星喰いと村、両方の命を救いたいと願う、健気で心優しい少女が泣いていた。

彼女は切実に自分に助けを求めている。

彼女は星の女神に仕える星拾いであった。

「わらわは言ったよなあ、星喰い」

水面に向かって優美な声で、女神は語りかけた。辺りには風ひとつなかった。

「本当に苦境に陥ったとき、それでもまだ助けを求めるならば、少しは助力してやらんこともない、と」

彼女の長く美しい髪が、ふわりと浮き上がった。その一瞬後に、小さな風が起こり始めた。

「まあ、お主の代わりに愛しき子が助けを求めておるのだから、よしとするか」

どこからか、彼女は小さな小箱を取り出した。ふたを開けると、そこには小さな指輪がおさまっていた。指輪は淡い光を放っていた。それは、星の光であった。

「星の光は癒しの光じゃ。同時に、慈愛の光でもある」

女神が手のひらの上の星の光にふっと息を吹きかけると、光が大きく、強くなった。それは女神を包むくらいに成長し、見事な金の光を放っていた。

女神はその指輪を、泉に向かってそっと投げた。

泉の水が、黄金に染まった。

「後は自分で何とかせいよ、星喰い」

その言葉を残して、美しい女性の姿が、泉のほとりからふっと消えた。

泉から放たれた光は森に広がり、村に到達した。

癒しと慈愛に満ちた光が、星降りの地一帯に広がった。

聖なる光を浴びせられ、炎は次第に弱まっていった。

慈愛の光に覆われて、人々は戦意を喪失していった。

癒しの光に包まれて、息のあるものの怪我が癒されていった。

愛に満ちた光が、星とともに星降りの地に降り注いだ。

\*\*\*\*\*

「う……」

泉のほとりにうつ伏せに倒れていた少女が、目を瞑ったまま呻き声を上げた。

次の瞬間、はっと両目を開けると、がばりと起き上がった。

急激に動いたので、少女は身体に痛みを覚えたようだったが、それどころではなかったのか、痛みをおして辺りを見渡した。そして、見つけた。

「星喰い！」

近くには黒髪の青年が仰向けに倒れていた。少女は慌てて駆け寄り、膝をついて息を確かめた。

どうやら彼は気を失っているだけのようであった。少女はほっと安堵のため息を漏らした。

彼の安否を確かめると、今度は今ここにいることを疑問に思った。

自分が何故ここにいるのか分からず、少女は小首を傾げた。小首を傾げたところで答えが出るものでもなかった。

よく見れば、青年の身体にはあれ程あった傷がひとつもなかった。

もしかすると女神がいるのではないかと少女は思ったが、その空間には少女と青年の二人しかいなかった。しかし女神の仕業に違いないと彼女は確信していた。

その時、青年の身体が僅かに動いた。少女は勢いよく振り返った。

「星喰い、気がついた？」

「……ここは……」

「貴方が封印されていた場所よ」

星喰いはゆっくりと上半身だけ起して頭を軽く振った。少女は彼の背中に手を回して、身体を支えた。

「……生きている」さも不思議そうに星喰いが言った。

「ええ、きっと、星の女神様のおかげね」

少女は満面の笑みを浮かべて答えた。少女の胸元で、星の女神が微笑んでいた。それを見て、星喰いは少女の言葉を信じることができた。彼の頭がだんだんはっきりしてきた。

「ねえ、星喰い」

少女の声に、彼は顔を上げた。若干頬を赤らめた少女が、胸元で両手を握り合わせて彼を見つめていた。

「ずっと、一緒にいさせてほしいの。貴方の傍に。貴方と一緒に、広い世界を見てみたいの」

お願い、と彼女は可愛らしく星喰いを見上げた。そんな彼女を、星喰いはいきなりひしと抱きしめた。

「そんなこと、願うまでもない」

今の彼には、彼女との幸福な未来が簡単に思い描けた。

泉のほとりに、穏やかに微笑み合う二人がいた。

\*\*\*FIN\*\*\*